

- ◆ 2018年10月10日発行ラインナップ
- ・ 農業資材 EXPO 盛況開催中!
- ・ 山形オキサミドハイグリーン会

農業資材EXPO 《アグリテック》 盛況開催中!

10月10日(水)から12日(金)まで、幕張メッセ(千葉県)で次世代のアグリビジネス関連中心の展示会が開催されている。農業ワールド2018は、農業資材EXPO、次世代農業EXPO、昨年よりも拡大した6次産業EXPOやガーデン・道具作業用品などの農業関連の展示会では国内最大級だ。昨年よりも大幅増の合計約1,400社もの農業資材関連会社が出展、その中で当社も昨年に引き続き、関連会社と共にメインスペースで出展している。今回も多数の出展があり、園芸品・肥料・農薬を中心に梱包・被覆資材・鳥獣害対策・畜産資材・農業機械・施設資材・プースが展開されている。昨年と同様、ITを活用した農業管理システム・AIとIoT利用のスマート農業・植物工場・大型ドローンなど進化した農業機械を取り入れた次世代農業についてのセミナーが開催されており、来場者は熱心に受講している姿が印象的であった。

今回から第6次産業化や農業法人に関する新しいブースが目立ち、加工食品に関する機器類やブランド商品の立ち上げ方を提案するブース等、新たなアグリビジネスとして注目されている様子が伺える。大手家電メーカーや携帯電話会社の系列会社は出展ブースを広げており、得意分野を生かした温度管理センサーや作業分析、注文管理、伝票作成、電子日誌のハード&ソフトを紹介するブースは来場者が多く関心度の高さが伺えた。また、今までは見かけられなかった出展者としては強風対策や地震対策等、自然災害に関する防災関連企業も目立つようになった。また、就職情報誌マイナビ農業、石川・埼玉・佐賀・熊本・宮崎県等の自治体が新規就農や企業参入等の相談窓口としてブースが出展されており、農業分野における人材確保や育成面でも展示会の幅が広がっているようだ。国内企業だけでなく昨年にも増して今回も中国・韓国・台湾等の近隣諸国からの出展が拡大し、商談ブースは活気に満ち溢れていた。

さて、今回の当社の出展コンセプトは、需要が伸びている緩効性肥料を中心とした商品ラインナップをわかりやすく展示しPR活動をしている。従来からの取引先・ホームセンターなどの量販店との商談は勿論のこと、農材店・農協・生産法人・一般農家に留まらず、中国・韓国・インド・中国などの諸外国のバイヤーとも商談を行っている。招待客も国内外を問わず増加しているようだが、特に海外から来られたバイヤーの方は質問事項が多く、商談に真剣に向かう姿勢が強く肌で感じられている。農業をビジネスと捉える関心度の高さを改めて認識した次第だ。

本EXPOは12日(金)まで開催されており、関心のある方は是非会場に足をお運び頂き最新の農業事情を肌で感じ取って頂きたい。御来場の際には、当社ブースにも是非お立ち寄りください。



山形オキサミドハイグリーン会

ドローンの運用を模索 山米商事株式会社

去る8月29日に山形県特約店の山米商事(株)が主催する山形オキサミドハイグリーン会が天童市にて開催された。同会はエムシー・ファータィコム(株)のノンコーティング緩効性チッソ肥料のオキサミドや総合微量要素肥料ハイグリーンの拡販普及を主たる目的においており、また県内の若手の肥料商が集い農業分野での最新情報や技術の研鑽を図る実務者研修会になっている。

今回は農業分野においても広がりを見せつつあるドローンを飛ばしての実用研修とスーパーオキサミドとハイグリーンの研修会がセットとなって行われた。山米商事は今春に3名のドローン操縦資格取得者を備え、農業分野における利用について検討を模索している。今回は販売店が用意した圃場において10Lタンクに水を搭載し30a区画の雪若丸が栽培されている圃場で散布デモ飛行を行った。飛行した機体は中国のDJI社製のAGRAS MG-1。同機のパフォーマンスは1バッテリーで最大15分飛行が可能で2haの液剤散布が可能だ。また、顆粒状の農薬(ドローンにて散布利用が許可されている薬剤に限る)も別アタッチメント散布機を搭載すれば散布が可能だ。参加者からはバッテリーの持ち時間や粒状肥料の利用可能度等質問が相次いだ。参加された販売店も何名か興味を持たれた様子であった。

室内研修では昨年よりデータ収集しているスーパーオキサミド肥料の県内外における試験結果の報告とハイグリーン・ホスピタの元肥時利用における水稻の試験データと効果ポイントのみどころについて説明がなされた。小西安農業資材からはハイグリーンの流し込みタイプとプール育苗時や葉面散布に併用して利用する新商材ハイボンの説明がなされた。ドローンにおいては当社の特約店も徐々にではあるが、機体を所有し農薬散布サービスの事業を開始したところも出て来た。農薬においては、流通での競争は一段と激しくなっているが、ドローンにおける農薬散布事業を展開することによって、散布サービスが付加価値を生み、多少なりとも農薬販売につながることもあるという。粒状肥料の散布においては顆粒状農薬を散布できる別アタッチメントにて施肥が可能としているメーカーもあるが、最大積載量が10kgまでしか利用可能な機体がないこと、施肥効率を考えた場合、高窒素成分の尿素や硫酸といった高成分の単肥くらいしか現段階では利用が見い出せていない。一般的に粒状肥料の粒径は2~4mm幅のためラフに散布する分には一考に構わないのだが、局所部分施肥や均一散布したい場合には粒径が揃っていないため偏りが出ることもあるとのことで、粒径を揃えるなどひと手間工夫が必要との意見もあるようだ。また、葉面散布においてもチッソ濃度が高く、散布後に葉焼け等を起こさないようなタイプの資材があれば利用価値は高いことが考えられる。ただし、このような高機能を有する資材はなかなか見当たらない。いずれにしても肥料においてはまだ利用自由度が小さいため追肥における圃場全体の空中散布はまだ発展途上といったところのようだ。

山米商事としてはドローンの購入は先行投資の位置づけであるとの事だが、実際に購入して最新の技術を取得しようとする姿勢は若い販売店スタッフからの信用度が増すだけでなく、これからの若い農業経営者にとっても情報を得ることが出来て頼もしく思われるだろう。今後の当会の取組が楽しみだ。(東京支店)



アグリテックには助川も毎日参加しております。ご来場の際には「ジャーナルみたよ!」とお声掛けください。心よりお待ちしております。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>